

## PS2-399 進行平滑筋肉腫に対する定速静注 Gemcitabine および Docetaxel 併用療法の安全性と有効性

尾崎 由記範<sup>1</sup>、柳原 武史<sup>1</sup>、湯川 裕子<sup>1</sup>、深谷 真史<sup>1</sup>、中村 能章<sup>1</sup>、長野 雅史<sup>1</sup>、小山 隆文<sup>1</sup>、五味 大輔<sup>1</sup>、  
大山 優<sup>1</sup>、高橋 克仁<sup>2</sup>  
亀田総合病<sup>1</sup>、キュアサルコーマボード 共同治療連携<sup>2</sup>

目的:これまで欧米では進行平滑筋肉腫に対する定速静注ゲムシタピンおよびドセタキセル併用療法の有効性は示されているが、本邦においては報告が少なくその位置付けは明確ではない。本邦における安全性と有効性を検証する。

方法:転移再発性平滑筋肉腫患者に対し、ゲムシタピン675mg/m<sup>2</sup>(定速静注法10mg/kg/分)・ドセタキセル25mg/m<sup>2</sup>をそれぞれD1, 8を3週毎に投与した。予定通り化学療法を施行するため必要に応じD5にはGCSFの予防投与を施行した。毒性はCTCAEv.4、効果判定はRECISTを使用した。

結果: PS0-4(0が8人、1が10人、2が3人、3が2人、4が0人)の転移再発性平滑筋肉腫患者23人(原発巣:後腹膜10、子宮6、結腸2、肺1、胃1、心臓1、卵巣1、腎1)、年齢中央値は58歳(29歳~70歳)、このうち13人は化学療法投与歴がなく、7人は2nd line、3人は3rd lineでありドキソルビシン、イフォスファミドなどの化学療法投与歴があった。毒性はgrade(G)3、4の好中球減少症が15人(65.2%)、発熱性好中球減少症は2人(8.7%)、貧血は7人(30.4%)、血小板減少は1人(4.3%)、出血は3人(13%)であった。病勢コントロール率は56.5% (CR 0、PR 4、SD 9)、PD 39.1%(9人)であった。無増悪生存期間中央値は3.3ヶ月(0.8~8.5ヶ月)であった。

結語:定速静注ゲムシタピンおよびドセタキセルの併用療法は本邦においても比較的安全に施行可能であり、進行性平滑筋肉腫に対して有効であった。今後更なる症例の集積、効果と毒性の検証が必要である。